

スポーツ経験者と審判員による判定の認識に関する検討

武藤 正哉 (22111351sm@tama.ac.jp)

1. 問題と目的

本研究は、齊藤・内田（2017）の「審判員の判定に関する心理学的考察-大学生サッカー選手を対象とした審判員の判定に関する印象調査-」を参考として研究を行う。

齊藤・内田（2017）は、大学生サッカー選手が審判の判定に対して持っている印象について、仮説を立て、検証することを目的としている。質問項目について勝利チームと敗戦チーム別に集計を行い、統計処理を行った。

この研究の結果は、①「勝利チームの方が（敗戦チームと比べて）、審判員の判定を不利だと感じている者が多い」、②「勝利チームの方が（敗戦チームと比べて）、試合中に審判員の判定が気になっている」、③「勝利チームと敗戦チームの間に、審判員の判定と試合結果との因果関係の感じ方について有意な差はない」、つまり「判定のせいで試合に勝った・負けた」と選手が思うかどうかには差はなかった。④「審判員による誤審は、その試合全体の判定に関する印象に影響を及ぼす」となった。

以上を踏まえて本研究の目的は、①「審判の判定と試合結果には因果関係があるかどうか」、②「誤審について試合中しか気にしないのだろうか」、③「誤審と感じた後の判定結果で不満の差はあるのだろうか」という3点について明らかにすることである。

また、それぞれの仮説について、①「審判の判定と試合結果には因果関係がある。」、②「人々は誤審について、試合中にしか気にしない。」、③「誤審と感じた後の判定結果が試合において重要であればあるほ

ど、選手たちの不満は大きくなる。」と考えられる。

2. 方法

本研究は、アンケートによる調査研究を実施する。

研究の対象者は、「クラブチームや部活動等でサッカー・フットサルをしていた経験を持つ人」、「それ以外」とし、この2つの結果は分けて集計することで経験の有無による差を明らかにする。

質問項目案について、まずはサッカー・フットサルの経験があるかどうかを聞く。上記の通り、経験の有無でそれぞれ集計を行う。次に、この研究のキーワードである「誤審」を意識したサッカーに関する例を作成し、例を使用した質問にいくつか答えてもらう。質問については5段階で評価を行う。（例：5. とてもそう思う～1. 全くそう思わない）

また、今後の方向性として、「自分の観戦者としての経験を活かした質問を入れてみる」や「サッカー・フットサル以外のスポーツを取り扱ってみる」などを挙げている。

3. 引用文献

齊藤茂, & 内田若希. (2017). 審判員の判定に関する心理学的考察: 大学生サッカー選手を対象とした審判員の判定に関する印象調査. *松本大学研究紀要*, 15, 37-49.